

それで、ユダヤ人たちは、「どうしてこの人は自分の肉を我々に与えて食べさせることができるのか」と言って、互いに議論し合った。イエスは言われた。「よくよく言うておく。人の子の肉を食べ、その血を飲まなければ、あなたたちの内に命はない。私の肉を食べ、私の血を飲む者は、永遠の命を得、私はその人を終わりの日に復活させる。私の肉はまことの食べ物、わたしの血はまことの飲み物だからである。私の肉を食べ、わたしの血を飲む者は、私の内にとどまり、私もまたその人の内にとどまる。生ける父が私をお遣わしになり、私が父によって生きるように、私を食べる者も私によって生きる。これは天から降って来たパンである。先祖たちが食べたが死んでしまったようなものではない。このパンを食べる者は永遠に生きる。」(ヨハネ 6:52~58)

主イエスが、「私は天から降って来たパンである」と言われたので、ユダヤ人たちはつぶやいて言った。イエスはヨセフの息子で、その家族も知っている。どうして、「天から降って来た」などと言うのかとつぶやいた。その人々に、「私をお遣わしになった父が引き寄せてくださらなければ、誰も私のもとに来ることはできない。私はその人を終わりの日に復活させる」と言われた。また、「信じる者は永遠の命を得ている。私は命のパンである」と強調された。先祖は荒れ野でマナを食べたが、死んでしまった。しかし、「私は天から降って来た生けるパンである。このパンを食べるならば、その人は永遠に生きる」と繰り返された。ユダヤ人たちは「どうしてこの人は自分の肉を我々に与えて食べさせることができるのか」といぶかった。主イエスは、「よくよく言うておく。人の子(メシア)の肉を食べ、その血を飲まなければ、あなたたちの内に命はない。私の肉を食べ、私の血を飲む者は、永遠の命を得、私はその人を終わりの日に復活させる。私の肉はまことの食べ物、わたしの血はまことの飲み物だからである」と言われた。22節~59節までの「主イエスは命のパン」に関する記述は聖餐の意味づけを明確に伝えるものである。

主イエスは「最後の晩餐」の時、パンを取り祝福して、それを裂き、「取りなさい。これは私の体である。」と言って弟子たちに与えられた。また杯を取り、感謝を捧げて彼らに与え、「これは、多くの人のために流される、私の契約の血である」と言われた。主イエスの体であるパンを食べ、主イエスの血であるぶどう酒を飲むことによって、罪の赦しの契約に与ることを表わされた。弟子たちは意味が分からなかったであろうが、十字架と復活を知って、教会は「聖餐」を聖礼典として受け継いでいった。

私は教会に行き始めた時、初めての聖餐式で、キリストの体であるパンを食べ、キリストの血であるぶどう酒を飲めという言葉聞いた時、何とグロテスクなことを言うのか、そんなものはいらないと思った。牧師になって、聖餐式を伴った礼拝後に、初めて教会に見えた方から、帰りの玄関で「聖餐式って気持ち悪いですね」と言われたことがある。当然の反応で、初代教会において、聖餐式は「人食宗教」と受け取られ、忌み嫌われた。

このような誤解と偏見に対し、著者ヨハネは、主イエスが「最後の晩餐」で行われた晩餐の真意を伝えたいと、「私の肉を食べ、わたしの血を飲む者は、私の内にとどまり、私もまたその人の内にとどまる。生ける父が私をお遣わしになり、私が父によって生きるように、私を食べる者も私によって生きる。これは天から降って来たパンである」と書いたのである。聖餐式は、パンを食べ、血を飲んで、主イエスと結び合い、神の永遠の命に与る礼典で、信仰をもって受け止められる秘義である。